

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 19 回
 第 5 章 古田足日先生
 その 2 「散文性のかく得」(下の前半)

昨年(2024 年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社 1974 年)の刊行 50 周年だった。私が古田足日先生(1927~2014 年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は 19 歳だった。

千葉省三

古田足日「さよなら未明—日本近代童話の本質—」(『現代児童文学論』くろしお出版 1959 年所収)から、もう一度引用する。

今日、千葉省三を再評価する機運が生まれているのは、少なくともぼくの場合、彼が散文による作家であったということに理由がある。たとえば、次のような文章だ。

すりうす屋の嘉右衛門じいさんのせどに、大ッきな、たんば栗が二本ある。／秋ンなると、栗の実が、露っぽい草の中へ、ボタン、ボタン、おっこちて、なにか、とてもでッかい甲虫みたいに、せなかを光らしてむぐっている。／夜なかに落ちたまったのを、朝早く、嘉右衛門じいさんが、ひろいに出る。／そのあとの、ひろい残しを、おれたち子供仲間がさがしに行く。／じいさんより、早く行きたいのだが、きまっていつでも後になる。／「あの、けちんぼじんつア、提灯さげて、くれえうち、ひらいに出ンだぞ、きっと……」

「ションベン稲荷」の書きだしだが、これを前にあげた未明、広介の書きだしとくらべてみれば、その差ははっきりするだろう。情景と行動がはっきり提示されているのだ。(注)

古田が引いた省三の「ションベン稲荷」(『童話集 竹やぶ』古今書院 1938 年所収)の書き出しから連想するのは、古田自身の『大きい 1 年生と小さな 2 年生』(偕成社 1970 年)の文章だ。書き出しではなく、「1 一年生のくせに 大きすぎる」の途中から。

ところで、あきよたちが花をつんでいるはらっぱのむこうはムギばたけで、ムギばたけのむこうはシバばたけで、シバばたけのむこうはネギばたけで、そのむこうには、いえが三げんならんでいました。

そのまん中のいえの子は、あきよたちのしらない男の子で、おがわまさやといいました。

あきよたちが花をつんでいるころ、まさやは、がけのあいだのさかみちを、おかあさんの手にぶらさがるようにして、うちのほうへかえっていくところでした。

まさやは、一年生になりたてのほやほやで、入学しきのかえりでした。まさや、あきよの学校は、ごぜんちゅうがしぎょうしきで、ごごが入学しきと、なん

年もまえから、きまっていました。

まさやは、せもたかく、からだも大きい子でした。(引用は『全集古田足日子どもの本』2、童心社 1993 年による)。

タイトルの『大きい1年生と小さな2年生』のうち、「小さな2年生」である、あきよと、友だちのまり子が紹介されたあと、「大きい1年生」のまさやが、はじめて登場する場面だ。古田が「散文による作家」とした千葉省三の文章と同じように、「情景と行動がはっきり提示されている」。作品の後半、まさやが、ひとりで遠い一本スギの森まで歩いて、あきよのためにホテルブクロを取りに行く冒険は、このような文章で順々に明快に描かれていく。

「子ども」への関心

実験的な『ぬすまれた町』(理論社 1961 年)のあと、古田は、『うずしお丸の少年たち』(講談社 1962 年)や『宿題ひきうけ株式会社』(理論社 1966 年)など、小学校高学年の読者のための作品を書く。幼年文学や中学年むけの創作が刊行されるようになるのは、『くいしんぼうのロボット』(小峰書店 1967 年)や『忍術らくだい生』(理論社 1968 年)、『もぐら原っぱのなかまたち』(あかね書房 1968 年)などからあとだ。『大きい1年生と小さな2年生』は 1970 年。幼年や中学年の読者を意識するようになったとき、古田のなかで、はっきり散文性が獲得されたのではないか。

1950 年代の「童話伝統批判」と呼ばれる議論と、それをうけて、1960 年前後に「現代児童文学」が成立したことは、この連載の第 2 回以降に折々述べてきた。敗戦後の状況のなかで、小川未明に代表される「童話」を批判的に検討しながら、子どもの文学の新しいありかたを模索した「童話伝統批判」をささえた問題意識は、つぎの三つだとしたことがある(宮川健郎『現代児童文学の語るもの』NHKブックス、1996 年など参照)。

- ① 「子ども」への関心——児童文学が描き、読者とする「子ども」を、生き生きしたものとしてつかまえる。
- ② 散文性の獲得——童話の詩的性格を克服する。
- ③ 変革への意志——社会変革につながる児童文学をめざす。

この①②③は、それぞれ、当時の評論のタイトルや評論のなかのことばである。①「子ども」への関心は、古田足日「子どもへの関心」(『日本児童文学』1957 年 2-3 月号)、②散文性の獲得は、やはり、古田の「散文性のかく得」(『小さい仲間』1954 年 7 月)。③変革への意志は、神宮輝夫が「戦後児童文学の位置づけ」(『日本児童文学』1967 年 10 月)などでいったことばである。神宮は、「政治、社会、人間などについての「変革への意志」を、日本の児童文学発展の原動力と考える。」と述べたのである。三つのうち二つが、古田足日が基になっているが、いま、思い出して考えてみると、この三つを「童話伝統批判」の問題意識とすること自体に古田先生の示唆があったと思う。

私は、三つの問題意識は「たがいに、からみあいながら、児童文学の新しいあり方を実現していく。」とした。古田足日のなかで、幼年や中学年の読者を意識す

るという「子ども」への関心が強くなったとき、散文性の獲得も行われたのではないか。

1969（昭和 44）年から翌年にかけて、『週刊読書人』が 29 回にわたるシリーズ「現代児童文学の争点」を掲載したことがある。さまざまなテーマについて、ふたりずつが意見を述べるという連載だ。第 1 回と第 2 回は、「子どものためか自己表現か」上下で、古田足日と山室静が書いた。児童文学は、作者の自己表現なのか、それとも、子ども読者のために書くものなのかというテーマである。

古田が執筆した第 1 回（1969 年 4 月 28 日）は、「子どものためか自己表現か」というタイトルのまま、古田の評論集『児童文学の旗』（理論社 1970 年）に収録されている。書き出しで「さきにぼくの結論をいっておこう。子どものためか、自己表現か、という二者択一的な問題の立て方そのものが、まちがっている。児童文学作品はその両者が統一されたとき、生まれてくるものだ。」（引用は『児童文学の旗』前掲による。以下も同じ）とした上で論じていく。書評新聞に掲載された短い文章のしめくくりは、こうだ。

もう一つ、ことばの問題がある。ことばはもともと社会的なものだ。自分にしかわからないいい方をすると、それは自己表現ではなく、ただの自己満足にしかすぎない。読者に対して伝達可能、かつ読者の中に一定の反響をおこさせる、ということばになったとき、自己およびことがらの追求は、はじめてなしとげられる。

読者と相互作用を持つ、この散文の文体は、少数の作家は別として、児童文学全体の中ではまだ確立されていない。

古田は、子ども読者とつながることのできる「ことば」を「散文の文体」と呼ぶ。幼年文学や中学年のための創作を刊行するようになったころの、1969 年の発言である。そして、1974（昭和 49）年の田畑精一との共作の絵本『おいしいのぼうけん』（童心社）のテキストは、この「散文の文体」によって書かれ、絵本のテキストとしては異例に長いものになった。

「おいしいの なかの ふたり」

昨年（2024 年）夏の神奈川近代文学館の企画展「没後 10 年 古田足日のぼうけん」の準備の途中で、古田先生のご遺族から文学館に寄贈された資料のなかから貴重なものがいくつも見つかった。この連載の第 15 回で、企画展の特に大きな目玉として、『おいしいのぼうけん』の草稿類と、早大童話会「少年文学」の旗の下に！（『少年文学』1953 年 9 月）の草稿をあげたが、それだけではない。今回は、「おいしいの なかの ふたり」のことを書こう。

「おいしいの なかの ふたり」は、古田足日文、安泰絵で、1973（昭和 48）年の 8 月から 10 月にかけて、『新婦人しんぶん』に 7 回にわたって掲載された読み物である。私は、この連載のことを知らなかった。企画展の編集にかかわる打ち合わせの席で、展示担当の O さんと H さんに見せられて、はじめて読んだ。あとで、『全集古田足日子どもの本』の別巻（童心社 1993 年）の西山利佳編「古田足日 著作目録」を確認したが、この目録にも記載されていない。

企画展の図録を見直すと、「おいしいの なかの ふたり」は、絵本『おいしいの

ぼうけん』の「第1稿」と紹介されているのだが、この言いかたが適当だったかどうか。『おいしいのぼうけん』のテキストは、何回も書き直されたはずで、企画展に展示された草稿類以外にも原稿があったのではないかと思う。「おいしいの なかの ふたり」は、登場人物の名前などに異同があるものの、物語の展開も文章も、刊行された絵本『おいしいのぼうけん』のテキストにほとんど重なる。「第1稿」というより、「第n稿」といったほうがよいような気がする。絵本が刊行される前年に、挿絵のある読み物として新聞に掲載された経緯も、いまは、わからない。

「おいしいの なかの ふたり」と『おいしいのぼうけん』のテキストをあらためて比べてみた。一番ちがいを感ずるのは、おいしいに閉じ込められたふたりが、おいしいの上と下とで手をつなぐ場面の描かれかただ。

まず、「おいしいの なかの ふたり」。おいしいの下の方のあきらが、もう音を上げそうになっている。『おいしいのぼうけん』のさとしと、あきは、「おいしいの なかの ふたり」では、たけひこと、あきらという名前になっている。みずのせんせいは、やまのせんせいだ。

「ぼく もう だめだよ」

やまのせんせいは ほっとしました。

ところが、たけひこが いいました。

「あーくん、がんばれ。手を つなごう」

たけひこの 手が 下に のびてきました。あきは しっかり その 手を にぎりました。あせだらけの あつい手でした。そこへ、もう 一ぼんの 手がおりにきました。

「そら、あーくんの ミニカー、かえすよ。これで あそべよ」(連載第3回)。

ここは、絵本『おいしいのぼうけん』では、どうなっているか。

「ぼく、もう だめだよ。」

みずのせんせいは ほっとしました。

ところが、さとしが いいました。

「あーくん。さっきは ごめんね。

ミニカー、かえすよ。これで あそべよ。」

さとしの てが したに のびてきました。

ミニカーを もらうとき、あきらの てに さとしの てが さわりました。あせを かいた、あつい てでした。

あきは おもわず いいました。(ここでページをめくる一宮川注)

「さとちゃん、てを つなごう。」

ふたりは あせで べとべとの てを しっかり にぎりあいました。さとしは いいました。

「あーくん がんばれ。」

二つのテキストでは、描かれる事柄の順序がちがっている。

「おいしいの なかの ふたり」では、まず、たけひこが「あーくん、がんばれ。手をつなごう」と言い出す。あきらが、のびてきた、たけひこの手をにぎる。その

あと、ふたりが取り合っていたミニカーを返すもう一本の手がのびてくる。

『おいしいのぼうけん』はどうか。最初に、さとしが「さっきは ごめんね。」といって、あきらにミニカーを返す。ミニカーを返す、汗をかいた熱い手にふれて、あきらが思わずいうのだ。——「さとちゃん、てを つなごう。」ふたりは、汗だらけの手をにぎりあい、さとしがいう。——「あーくん、がんばれ。」

ここは、絵本では表紙に描かれた重要な場面だけれど、おいしいの上と下で、ふたりが手をつなぐことは、『おいしいのぼうけん』のなかで、自然に、そして必然のこととして成立する。「おいしいの なかの ふたり」をへて、古田の「散文」は、ようやく明瞭な輪郭をもったのである。(つづく)

(注)

古田は、「今日、千葉県三を再評価する機運が生まれている」といった。この連載でも何度か言及した石井桃子らの『子どもと文学』（中央公論社）は、1960年の刊行で、宮沢賢治、新美南吉とともに千葉県三を高く評価した。『子どもと文学』の刊行後に、石井桃子は、こう述べた。

私自身は、宮沢賢治はべつとして、千葉氏、新美南吉の作品は、最近になってはじめて接したといってもいいので、そこに目に見える物語の世界を発見した時のおどろきは大きく、いままで社会的にはほとんどどうもれたままにされていた、これらの作家たちを喜びでむかえたい気持ちは、たしかにありました。(石井「子どもは歩む 坪田譲治さんにこたえる」『朝日新聞』1960年10月16日。引用は日本児童文学者協会編『現代児童文学論集』2、日本図書センター2007年による)

また、国分一太郎他編『文学教育基礎講座』3『児童文学をどう鑑賞するか』（明治図書1957年）の「Ⅲ 鑑賞の実際（日本の場合）」に掲載されている一編「虎ちゃんの日記（千葉県三）」の執筆者は斎藤文恵。作品の文章を引用して、「このように描写はこまかい、このような描写の仕方は、未明や広介とちがう方法である。(中略)ただ細かい描写というのでなく、子どもの感覚をはずれない細かさなのである。」と述べている。斎藤文恵は、1953（昭和28）年に古田先生と結婚した文恵さんだ。巻末の執筆者紹介には、「日本女子大卒。高校教諭。」と記されている。古田先生も、同じ章に「銀時計（関英雄）」を書いている。